

【資料1】丸山眞男、加藤周一映画年表

	丸山眞男 (1914~96年)	加藤周一 (1919~2008年)
1914 (大正3) 年	3月22日、大阪府東成郡天王寺村において、丸山幹治・セイの次男として生まれる	
1919 (大正8) 年		9月19日、東京府東京市本郷区本富士町一番地において、加藤信一・織子の長男として生まれる
1920 (大正9) 年	4月、兵庫県武庫郡精道村立精道尋常小学校に入学	
1921 (大正10) 年	春、東京市四谷区立四谷第一尋常小学校に転校 この頃、父に連れられて、初めて映画 (活動写真) を浅草で観る	
1923 (大正12) 年	小学校時代に、四谷館などで『オーバー・ゼ・ヒル』 (H・ミラード監督) や連続大活劇ものなどを観て映画ファンとなる 関東大震災に遭い、長谷川如是閑宅で一時避難生活を送る	
1925 (大正14) 年	この頃、『荒木又右衛門』 (池田富保監督) などチャンバラ映画を盛んに観る	
1926 (昭和元) 年	3月、東京府立第一中学校入学試験に合格。合格祝いに新宿武蔵野館で『ポー・ジェスト』 (H・ブレノン監督、弁士徳川夢声) を観る 4月、東京府立第一中学校に入学。この頃、新宿武蔵野館で『カリガリ博士』 (R・ヴィーネ監督) を観る。小学校時代に続いて映画に熱中し、女優ジャネット・ゲイナーのファンになる。午後の授業をエスケープして芝園館などに行く	4月、東京府豊多摩郡渋谷町立常磐松尋常小学校に入学
1927 (昭和2) 年	『ビッグ・パレード』 (K・ヴィダー監督)、『第七天国』 (F・ボーゼージ監督)	
1928 (昭和3) 年	『新版大岡政談』 (伊藤大輔監督)、『つばさ』 (W・A・ウエルマン監督)	
1929 (昭和4) 年		この頃、母方の祖父・増田熊六に連れられて、従兄弟たちとよく映画を観に行く。熊六はとりわけ「西洋もの」を好んだ
1930 (昭和5) 年	『西部戦線異状なし』 (L・マイルストーン監督) など外国トーキー映画や傾向映画『何が彼女をそうさせたか』 (鈴木重吉監督)、『アジアの嵐』 (V・ブドフキン監督)、『アスファルト』 (J・マイ監督、弁士徳川夢声) などを観る	
1931 (昭和6) 年	4月、第一高等学校文科乙類に入学 中学時代のクラス同人雑誌『四平会会誌』に「ディートリツヒを語る」を発表 『モロッコ』 (J・V・スタンバーグ監督)、『地獄の天使』 (H・ヒューズ監督)、『大地』 (A・ドヴジェンコ監督)、『西部戦線一九一八年』 (G・W・パブスト監督)、『三文オペラ』 (G・W・パブスト監督)、『仇討選手』 (内田吐夢監督)	4月、東京府立第一中学校に入学 『三文オペラ』 (G・W・パブスト監督)
1932 (昭和7) 年	『自由を我等に』 (R・クレール監督)、『人生案内』 (N・エック監督)	
1933 (昭和8) 年	4月、唯物論研究会の講演会に参加し、本富士署に検挙・拘留される 11月、ナチスの宣伝映画『ヒトラー青年』 (H・シュタインホフ監督) を観る 『巴里祭』 (R・クレール監督)、『制服の処女』 (L・ザーガン監督)、『夢みる唇』 (P・ツィンナー監督)、『雨』 (L・マイルストーン監督)	『巴里祭』 (R・クレール監督)
1934 (昭和9) 年	4月、東京帝国大学法学部政治学科に入学 『会議は踊る』 (E・シャレル監督)	『会議は踊る』 (E・シャレル監督)、『商船テナシチー』 (J・デュヴィヴィエ監督)、『隣の八重ちゃん』 (島津保次郎監督)
1935 (昭和10) 年	『外人部隊』 (J・フェデー監督)	『未完成交響楽』 (W・フォルスト監督)、『モンパルナスの夜』 (J・デュヴィヴィエ監督)、『外人部隊』 (J・フェデー監督)
1936 (昭和10) 年		4月、第一高等学校理科乙類に入学。庭球部と映画演劇研究会に所属。当時公開された映画のほとんどを妹の本村久子氏と連れ立って観に行っていた。特にJ・デュヴィヴィエをはじめとする東和商事輸入のヨーロッパ映画を熱心に観ていた。『ゴルゴダの丘』 (J・デュヴィヴィエ監督)、『地の果てを行く』 (J・デュヴィヴィエ監督)、『我等の仲間』 (J・デュヴィヴィエ監督)、『オペラハット』 (F・キャブラ監督)、『ミモザ館』 (J・フェデー監督) 12月、第一高等学校『向陵時報』に「映画評「ゴルゴダの丘」」を藤澤正という筆名で発表
1937 (昭和12) 年	4月、東京帝国大学法学部助手となり、南原繁の指導を受ける	『新しき土』 (A・ファンク、伊丹万作監督)、『どん底』 (J・ルノワール監督) この頃から、ノート (「青春ノート」) をとりはじめる (~42年)
1938 (昭和13) 年		『饅頭騎士』 (J・フェデー監督)、『冬の宿』 (豊田四郎監督)、『泣虫小僧』 (豊田四郎監督)、『に

	『五人の斥候兵』（田坂具隆監督）、『路傍の石』（田坂具隆監督）	んじん』（J・デュヴィヴィエ監督）、『舞踏会の手帖』（J・デュヴィヴィエ監督）、『緞方教室』（山本嘉次郎監督）、『牧場物語』（木村荘十二監督）、『路傍の石』（田坂具隆監督）
1939（昭和14）年	『暖流』（吉村公三郎監督）	『望郷』（J・デュヴィヴィエ監督）、『素晴しき休日』（J・キューカー監督）、『ブルグ劇場』（W・フォレスト監督）、『土と兵隊』（田坂具隆監督）
1940（昭和15）年	6月、東京帝国大学法学部助教授となる 『民族の祭典』（L・リーフェンシュタール監督）、『美の祭典』（L・リーフェンシュタール監督）	4月、東京帝国大学医学部に入学 『家庭教師』（大庭秀雄監督）
1941（昭和16）年	11月、『スミス都へ行く』（F・キャブラ監督）を観る（戦時中に見た最後のアメリカ映画）	12月、『舞踏会の手帖』（J・デュヴィヴィエ監督）をもう一度観る
1942（昭和17）年	10月、講義（東洋政治思想史）を開始する 『ハワイ・マレー沖海戦』（山本嘉次郎監督）	秋、中村眞一郎、福永武彦、窪田啓作らと文学集団「マチネ・ポエティック」を結成
1943（昭和18）年	『世界に告ぐ』（H・シュタインホフ監督）	9月、繰り上げ卒業により、東京帝国大学附属医院医局（佐々内科）の副手となる
1944（昭和19）年	7月、応召し平壤に向かうが、10月に病気のため招集解除	
1945（昭和20）年	3月、臨時召集により広島市宇品の陸軍船舶司令部に応召 『姿三四郎』（黒澤明監督）、『宮本武蔵』（溝口健二監督） 8月、宇品で被爆し敗戦を迎える。復員して青年文化会議、庶民大学三島教室に参加	春、東京帝国大学医学部佐々内科教室と共に信州上田の結核療養所に疎開 8月、上田で敗戦を迎える 10月、「原子爆弾影響日米合同調査団」の一員として約2か月間広島に滞在し、調査に従事
1946（昭和21）年	2月、思想の科学研究会、二〇世紀研究所に参加。5月、『超国家主義の論理と心理』を発表	『天皇制を論ず』、『天皇制について』、『新しき星輩派に就いて』を発表
1948（昭和23）年		『恋恋』（J・ドラノワ監督）、『女』（木下恵介監督）、『面影』（五所平之助監督）、『美女と野獣』（J・コクトー監督）、『海の牙』（R・クレマン監督）
1949（昭和24）年		『大いなる幻影』（J・ルノワール監督）
1950（昭和25）年	6月、東京大学法学部教授となる。平和問題談話会が全面講和・非武装中立・東西両陣営の平和共存を主張する際に中心的な役割を果たす	『賭はなされた』（J・ドラノワ監督）、『無防備都市』（R・ロッセリーニ監督）、『自転車泥棒』（V・デ・シーカ監督）、『羅生門』（黒澤明監督）
1951（昭和26）年		11月、医学研究のため、フランス政府半給費留学生として渡仏 『四重奏』（R・スマート監督）、『オルフェ』（J・コクトー監督）
1952（昭和27）年	『サンセット大通り』（B・ワイルダー監督）、『ファウスト（悪魔編）』（C・ガローネ監督）、『天井桟敷の人々』（M・カルネ監督）、『ヨーロッパの何処かで』（G・V・ラドヴァニ監督）、『欲望という名の電車』（E・カザン監督）、『悪魔の美しさ』（R・クレレル監督）、『エロイカ』（W・コルトム＝フェルテ監督）、『凱旋門』（L・マイルストーン監督）	『禁じられた遊び』（R・クレマン監督）、『ライムライト』（G・チャップリン監督）、『Avec André Gid』（M・アレグレ監督）
1953（昭和28）年		『ボルジア家の毒薬』（C＝ジャック監督）、『情炎の女サロメ』（W・ディターレ監督）
1954（昭和29）年		『洪水の前』（A・カイヤット監督）、『恐怖の報酬』（H＝G・クルーゾー監督）
1955（昭和30）年	『鉄路の闘い』（R・クレマン監督）、『裏窓』（A・ヒッチコック監督）、『アウシュウィッツの女囚』（W・ヤクボフスカ監督）、『ドン・カミロ頑張り』（J・デュヴィヴィエ監督）、『パンと恋と夢』（L・コメンチーニ監督）、『もず』（J・ファーラー監督）、『フレンチ・カンカン』（J・ルノワール監督）、『大いなる希望』（D・コレッティ監督）、『スタア誕生』（G・キューカー監督）、『生きものの記録』（黒澤明監督）、『赤と黒』（C・オータン＝ララ監督）、『悪徳警官』（R・ローランド監督）、『完全なる良人』（S・ギリアット監督）、『しのび遣い』（R・クレマン監督）、『ナポリの饗宴』（E・ジャンニーニ監督）、『風車の秘密』（R・ゾープ監督）	3月、フランスより帰国し、東京大学医学部附属病院に復帰 6月、「日本文化の雑種性」を発表 『ファンタジア』（B・シャープスティーン監督）
1956（昭和31）年	『夏の嵐』（L・ヴィスコンティ監督）、『われら巴里ッ子』（M・カルネ監督）、『愛情は深い海のごとく』（A・リトヴァク監督）、『ロメオとジュリエット物語』（L・アルンシュタム監督）、『マーティ』（D・マン監督）、『旅情』（D・リーニ監督）、『河の女』（M・ソルダール監督）、『スミス都へ行く』（F・キャブラ監督）、『現金に手を出すな』（J・ベッケル監督）、『空中ぶらんこ』（G・リード監督）、『居酒屋』（R・クレマン監督）、『天井桟敷の人々』（M・カルネ監督）、『愛情は深い海のごとく』（A・リトヴァク監督）、『ピラミッド』（H・ホークス監督）、『夜と霧』（A・レネ監督）	『赤い風船』（A・モラリス監督）
1957（昭和32）年	『過去をもつ愛情』（H・ヴェルヌイユ監督）	『抵抗（レジスタンス）—死刑囚の手記より—』（R・ブレッソン監督）、『宿命』（J・ダッシン監督）、『マダムと泥棒』（A・マッケンドリック監督）、『戦場にかける橋』（D・リーニ監督）、『王子と踊子』（L・オリヴィエ監督）
1958（昭和33）年	『眼には眼を』（A・カイヤット監督）、『情婦マノン』（H＝G・クルーゾー監督）、『楢山節考』（木下恵介監督）、『鶴は翔んでゆく』（M・カラトゾフ監督）、『静かなるドン（黎明編・憂鬱編）』（S・ゲラーシモフ監督）、『モダン・タイムス』（G・チャップリン監督）、『殺し屋ネルスン』（D・シーゲル監督）、『女優志願』（S・ルメット監督）、『戦場にかける橋』（D・リーニ監督） <small>2月、加藤田一との対談「『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」を『映画評論』に発表</small>	『眼には眼を』（A・カイヤット監督）、『法隆寺』（羽仁進監督）

	10月、加藤周一との対談『「眼には眼を」に見るアラブ対西欧』を『映画評論』に発表	3月、丸山眞男との対談『「眼には眼を」に見るアラブ対西欧』を『映画評論』に発表
1960 (昭和35) 年	日米安保条約改定反対運動に参加。『ニュールンベルグの戦犯 13 階段への道』(F・V・ポドマニツキー監督)、『チャップリンの独裁者』(C・チャップリン監督)、『ロベレ将軍』(R・ロッセリニ監督)	10月、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学に准教授として赴任。日本文化史を講じる(～69年)
1961 (昭和36) 年	10月、米国で在外研究(～62年)。『夜と霧』(A・レネ監督)	
1963 (昭和38) 年		『Les Abysses (深淵)』(N・ババタキス監督)、『Mourir à Madrid (マドリッドに死す)』(F・ロシフ監督)、『Joli Mai (美しき五月)』(C・マルケル監督)
1967 (昭和42) 年		『中国女』(J=L・ゴダール監督)
1968 (昭和43) 年		8月に『羊の歌』、9月に『続羊の歌』を刊行。11月、「言葉と戦車」を発表 『ワン・プラス・ワン』(J=L・ゴダール監督)
1969 (昭和44) 年	東大紛争の影響で講義を中止	『プリティッシュ・サウンズ』(J=L・ゴダール監督)
1971 (昭和46) 年	3月、東京大学法学部教授を停年を待たずに辞職する 『おかしな夫婦』(A・ヒラー監督)、『罪と罰』(L・クリジャーノフ監督)	『ありふれたファシズム 野獣たちのバラード』(M・ロンム監督)、『紅色娘子軍』、『日本侠客伝 刃(ドス)』(小沢茂弘監督)
1972 (昭和47) 年	『帰郷』(A・アロフ他監督)、『ラムの大通り』(R・アンリコ監督)	『関東緋桜一家』(マキノ雅弘監督)
1973 (昭和48) 年		この頃、女性史研究者、映画研究家の矢島翠と結婚
1975 (昭和50) 年	英国・米国で在外研究(～76年)	2月、『日本文学史序説 上』を刊行
1976 (昭和51) 年		『愛のコリーダ』(大島渚監督)
1977 (昭和52) 年		『密告の砦』(M・ヤンチャー監督)、『欲望のあいまいな対象』(L・ブニュエル監督)
1978 (昭和53) 年		『遠い雷鳴』(S・レイ監督)、TV映画『ホロコースト 戦争と家族』(M.J. チョムスキー監督)
1979 (昭和54) 年		『旅芸人の記録』(T・アンゲロプロス監督)
1980 (昭和55) 年		4月、『日本文学史序説 下』を刊行 『影武者』(黒澤明監督)、『大理石の男』(A・ワイダ監督)
1981 (昭和56) 年		『オブローモフの生涯より』(N・ミハルコフ監督)
1983 (昭和58) 年		『サン★ロレンツォの夜』(P・タヴィアーニ監督)、『ことの次第』(W・ヴェンダース監督)、『Le Japon Insolite (おどろくべき日本)』(F・ライヒェンバッハ監督)、『そして船は行く』(F・フェリーニ監督)、『遠い一本の道』(左幸子監督)
1984 (昭和59) 年		7月、「夕陽妄語」の連載を『朝日新聞』で始める(～2008年)
1985 (昭和60) 年		『SHOAH ショア』(C・ランズマン監督)
1986 (昭和61) 年		『シテール島への船出』(T・アンゲロプロス監督)、『パパは、出張中!』(E・クストリッツァ監督)
1987 (昭和62) 年	『ローザ・ルクセンブルク』(M・V・トロッタ監督)	『ローザ・ルクセンブルク』(M・V・トロッタ監督)
1988 (昭和63) 年		4月、立命館大学国際関係学部客員教授に就任(～2000年) 『火垂るの墓』(高畑勲監督)
1989 (平成元年) 年		『利休』(勅使河原宏監督)、『千利休 本覺坊遺文』(熊井啓監督)
1990 (平成2) 年		『悲情城市』(侯孝賢監督)
1991 (平成3) 年		『安重根と伊藤博文』(オム・キルソン監督)
1992 (平成4) 年		4月、立命館大学国際平和ミュージアム館長に就任(～95年)
1993 (平成5) 年		『Pétain (ベタン)』(J・マルブフ監督)
1994 (平成6) 年		『さらば、わが愛 霸王別姫』(陳凱歌監督)、『戯夢人生』(侯孝賢監督)、『青い嵐』(田壮壮監督)、『鷲の指輪』(A・ワイダ監督)
1995 (平成7) 年		『SHOAH ショア』(C・ランズマン監督)、『エイジアン・ブルー 浮島丸サコン』(堀川弘通監督)

1996 (平成8) 年	8月15日、進行性肝臓癌のため82歳で死去	『ピフォア・ザ・レイン』 (M・マンチェフスキー監督)、『ユリシーズの瞳』 (T・アンゲロプロス監督)、『アンダーグラウンド』 (E・クストリッツァ監督)
1998 (平成10) 年		『パーフェクトサークル』 (A・ケノヴィッチ監督)、『南京1937』 (呉子牛監督)、『永遠と一日』 (T・アンゲロプロス監督)
1999 (平成11) 年		『笑う男』 (P・レニ監督)
2001 (平成13) 年		『ウンベルト・D』 (V・デ・シーカ監督)
2003 (平成15) 年		『オランダの光』 (P=R・d・クローン監督)
2004 (平成16) 年		6月、「九条の会」の呼びかけ人に加わる 『10ミニッツ・オールダー』 (B・ベルトリッチ他監督)
2005 (平成17) 年		『エレニの旅』 (T・アンゲロプロス監督)
2008 (平成20) 年		12月5日、多臓器不全のため89歳で死去

- ・随筆、座談、回想、日記などから、丸山と加藤が確実に観たと思われる映画を記載した。
- ・映画は、基本的に丸山と加藤が観た年に記載し、それが不明なものは日本公開年に記載した。
- ・赤色で表記されている映画は、両者が共通して観ているもの。

【資料2】加藤周一映画・演劇関連著作集

初出	タイトル	取り上げられている主な映画・演劇	収録
『向陵時報』1936年12月16日付	「映画評「ゴルゴダの丘」」	『ゴルゴダの丘』ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1935年、フランス	
『向陵時報』37年2月18日付	「映画評『新しき土』」	『新しき土』アーノルド・ファンク、伊丹万作監督、1937年、日本・ドイツ	自1
『向陵時報』38年2月1日付	「〔映画評〕鎧なき騎士」	『鎧なき騎士』ジャック・フェーデ監督、1937年、英国	
『向陵時報』38年10月18日付	「映画『冬の宿』について」	『冬の宿』豊田四郎監督、1938年、日本	
『東京大学新聞』48年2月12日付	「〔映画評〕悲恋」	『悲恋』ジャン・ドラノワ監督、1943年、フランス	
『展望』49年3月号	「戦後のフランス映画」		
『文学界』50年3月号	「サルトルと映画「賭はなされた」を繞つて」	『賭はなされた』ジャン・ドラノワ監督、1947年、フランス	
『文藝』50年10月号	「ボヴァリー夫人——映画と小説」		
『展望』51年1月号	「映画の問題——『無防備都市』について」	『無防備都市』ロベルト・ロッセリーニ監督、1945年、イタリア	著11
『夕刊西日本新聞』51年3月15日	「ウの目タカの目 映画博物館」		
『三田新聞』51年4月20日付	「映画批評の在り方」		
『夕刊西日本新聞』51年6月7日付	「ウの目タカの目 懐かしの日本映画」		
『西日本新聞』52年3月19日付	「フランス映画の一面」		
『西日本新聞』52年4月15日付	「映画に現われたジイド——文学的生涯の再構成」		
『東京タイムズ』53年6月7日付	「映画にも冷戦」		
『西日本新聞』53年7月18日付	「五所平之助氏の意見」		
『西日本新聞』53年11月28日付	「似て非なる二つの映画——サロメとリュクレ」		
『西日本新聞』54年5月1日付夕	「もめる映画“洪水以前”」	『洪水の前』アンドレ・カイヤット監督、1954年、フランス	
『日本経済新聞』57年5月18日付	「映画の古典主義」		
『映画芸術』57年7月号	「映画における古典主義の成立」	『オルフェ』ジャン・コクトー監督、1950年、フランス 『無防備都市』ロベルト・ロッセリーニ監督、1945年、イタリア 『抵抗—ある死刑囚の手記より—』ロベール・ブレッソン監督、1956年、フランス 『オルフェ』ジャン・コクトー監督、フランス、1950年 『禁じられた遊び』ルネ・クレマン監督、1952年、フランス	著11、自1
『映画評論』57年11月号	「『宿命』とよばれた映画」	『宿命』ジュールス・ダッシン監督、1957年、フランス	著11
『映画評論』57年、14巻7号	「座談会 映画について——ブレッソンから狸御殿まで」		岩崎昶・原田義人・福永武彦・中村真一郎との対談
『映画評論』58年1月号	「『座談会』新しい戦争の寓話——「戦場にかける橋」」	『戦場にかける橋』デヴィッド・リーン監督、1957年、英国・アメリカ	松山善三・菊村到との座談
『映画評論』58年3月号	「『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」	『眼には眼を』アンドレ・カイヤット監督、1957年、フランス・イタリ	対2
『芸術新潮』58年6月号	「記録映画の効用——映画「法隆寺」をめぐる」	『法隆寺』羽仁進監督、1958年、日本	丸山眞男との対談
『毎日グラフ』63年8月4・11・18日号	「パリの芝居・パリの映画」	『Les Abysses (深淵)』ニコス・パパタキス監督、1963年、フランス 『Mourir à Madrid (マドリッドに死す)』フレデリック・ロシフ監督、 『Joli Mai (美しき五月)』クリス・マルケル監督、1963年、フランス	著10
『展望』72年2月号	「紅色娘子軍、ゴダールおよび仏像」	『紅色娘子軍』1970年、中国 『中国女』ジャン＝リュック・ゴダール監督、1967年、フランス	著11
『毎日新聞』72年3月7～8日付	「さらば藤純子」	『関東緋桜一家』マキノ雅弘監督、1972年、日本	著7
『毎日新聞』77年2月23日付夕	「真面目な冗談 道化にとって座頭市とは何か」	『座頭市』シリーズ	自6
『毎日新聞』77年9月21日付夕	「真面目な冗談 淀長流解説『愛のコリーダ』」	『愛のコリーダ』大島渚監督、1976年、日本・フランス	自6
『朝日ジャーナル』79年4月6日号	「山中人間話——〈ホロコースト〉について」	『ホロコースト 戦争と家族』M. J. チョムスキー監督、1978年、米 (TV映画)	自6
『朝日新聞』80年11月10日付夕	「山中人間話 二つの映画」	『大理石の男』アンジェイ・ワイダ監督、1977年、ポーランド 『影武者』黒澤明監督、1980年、日本	著21、自6
『友 Iwanami Hall』139、81年1月	「映画・東京・「岩波ホール」」		自6

『朝日新聞』82年10月18日付夕	「山人閑話 映画一つ・小説一つ」	『オブローモフの生涯より』ニキータ・ミハルコフ監督、81年、ソ連	著21
『朝日ジャーナル』83年3月18日	「外交官モラエスの変身——映画『恋の浮島』を	『恋の浮島』パウロ・ローシャ監督、83年、日本	
『朝日新聞』86年2月21日付夕	「夕陽妄語 二つの映画——バルカン半島から」	『パパは、出張中！』エミール・クストリッツァ監督、1985年、ユーゴ 『シテール島への船出』テオ・アンゲロプロス監督、1983年、ギリ シャ・イタリア	著21
『朝日新聞』87年9月17日付夕	「夕陽妄語 「自発性」ということ」	『ローザ・ルクセンブルク』マルガレーテ・フォン・トロツタ監督、	著21
『朝日新聞』88年12月19日付夕	「夕陽妄語 一九八八年の思い出三つ」	『火垂るの墓』高畑勲監督、1988年、日本	著22
『朝日新聞』89年10月16日付夕	「夕陽妄語 利休・二つの映画」	『利休』勅使河原宏監督、1989年、日本 『千利休 本覺坊遺文』熊井啓監督、1989年、日本	著22、自8
『朝日新聞』91年7月18日付夕	「夕陽妄語 歴史の見なおし」	『安重根と伊藤博文』オム・ギルソン監督、1979年、北朝鮮	著22
『朝日新聞』93年5月31日付夕	「夕陽妄語 映画『ペタン』の事」	『Pétain (ペタン)』ジャン・マルブフ監督、1993年、フランス	著22
『朝日新聞』94年1月20日付夕	「夕陽妄語 中国映画三題」	『さらば、わが愛 霸王別姫』陳凱歌監督、1993年、香港 『戯夢人生』侯孝賢監督、1993年、台湾 『青い嵐』田壮壮監督、1993年、中国	著22、自9
『朝日新聞』95年1月23日付夕	「夕陽妄語 『鷲の指輪』」	『鷲の指輪』アンジェイ・ワイダ監督、1992年、ポーランド・英・仏・独	自9
『朝日新聞』95年3月22日付夕	「夕陽妄語 アウシュヴィッツ解放五十周年」	『SHOAH ショア』クロード・ランズマン監督、1985年、フランス	
『朝日新聞』95年9月20日付夕	「夕陽妄語 『エイジアン・ブルー』の事」	『エイジアン・ブルー 浮島丸サコン』堀川弘通監督、1995年、日本	
『朝日新聞』96年3月19日付夕	「夕陽妄語 三つの映画——バルカンから」	『ピフォア・ザ・レイン』ミルチョ・マンチェフスキー監督、1994年、 『ユリシーズの瞳』テオ・アンゲロプロス監督、1995年、フランス・イ 『アンダーグラウンド』エミール・クストリッツァ監督、1995年、フラン ス・ドイツ・ハンガリー	
『朝日新聞』98年4月22日付夕	「夕陽妄語 サライェヴォと南京」	『パーフェクトサークル』アデミル・ケノヴィッチ監督、1997年、ボス 『南京1937』呉子牛監督、1998年、日本・中国・香港・台湾	自9
『朝日新聞』98年12月16日付夕	「夕陽妄語 濃い霧の中から」	『南京1937』呉子牛監督、1998年、日本・中国・香港・台湾	自9
『朝日新聞』99年5月20日付夕	「夕陽妄語 「笑う男」再生」	『笑う男』パウル・レニ監督、1928年、アメリカ	
『朝日新聞』2000年8月25日付夕	「夕陽妄語 名優たちの想出」	『マダムと泥棒』アレクサンダー・マッケンドリック監督、1955年、英 国 『戦場にかける橋』デヴィッド・リーン監督、1957年、アメリカ	
『朝日新聞』02年1月23日付夕	「夕陽妄語 日常性と非日常性」	『ウンベルト・D』ヴィットリオ・デ・シーカ監督、1952年、イタリア	
『朝日新聞』03年9月18日付夕	「夕陽妄語 「オランダの光」」	『オランダの光』ピーター＝リム・デ・クロン監督、2003年、オランダ	
『朝日新聞』04年1月22日付夕	「夕陽妄語 映画・時間について」	『10ミニッツ・オールダー』ベルナルド・ベルトルッチ他監督、2002	
『朝日新聞』05年1月24日付夕	「夕陽妄語 映画と空間」	『エレニの旅』テオ・アンゲロプロス監督、2004年、フランス・ギリ シャ・イタリア	自10

自：『加藤周一自選集』（岩波書店）
著：『加藤周一著作集』（平凡社）
対：『加藤周一対話集』（かもがわ出版）

【資料3】丸山眞男映画・演劇関連著作集

初出	タイトル	取り上げられている主な映画・演劇	収録	
『中央公論』56年7月号	「記録映画「夜と霧」について」	『夜と霧』アラン・レネ監督、1955年、フランス	集6	
『中央公論』57年5月号	「映画・思想・政治」		座2	岡本博、 武田泰淳 との鼎談
『映画評論』58年3月号	「『眼には眼を』に見るアラブ対西欧」	『眼には眼を』アンドレ・カイヤット監督、1957年、フランス・イタリア		加藤周一 との対談
『映画評論』58年12月号	「映画の思想性と大衆性」		座3	福田定良 との対談
『民話』59年1月号	「現代の政治的状況と芸術」		座3	埴谷雄高 との対談
『映画評論』59年5月号	「映画・女性・現代——現代芸術に映画は何をもたらすか」		座3	岡本博、 左幸子と の鼎談
丸山眞男編『人間と政治 人間の研究IV』有斐閣、61年	「現代における人間と政治」	『独裁者』チャールズ・チャップリン監督、1940年、アメリカ	集9	
『ユリイカ』78年3月号	「文学と学問」		座8	埴谷雄高 との対談
『'60』10号、79年4月2日	「映画とわたくし」		集11	
1980年	「『加藤周一著作集』をめぐって——W氏との対談」	『暖流』吉村公三郎監督、39年、日本	別集3	
『図書』88年4月号	「映画『ローザ・ルクセンブルク』をめぐって」	『ローザ・ルクセンブルク』マルガレーテ・フォン・トウロッタ監督、85年、西独	座9	

集：『丸山眞男集』

座：『丸山眞男座談』

別集：『丸山眞男集 別集』

※いずれも岩波書店